

BULLETIN
OF
THE SOCIETY FOR NEAR EASTERN
STUDIES IN JAPAN
(NIPPON ORIENTO GAKKAI)

Vol. XLVIII No. 1

2005

CONTENTS

Articles:

TODA Satoshi, A History Seen from a Literary Work, and Vice Versa: Some Reflections on the <i>Life of Saint Macarius the Egyptian</i>	1
SASAKI Tatsuo and SASAKI Hanae, Verification of Urbanization at <i>Julfar</i> -Excavated Houses, Finds and Topography	26
FUJIKI Kenji, The Shoe Industry Guilds in Eighteenth-Century Istanbul	49
UENO Masayuki, Ottoman Integration Policy aimed at Non-Muslim Subjects during the Reign of Mahmud II: A Case of the Armenian Catholic Community	69
Notes:	
SUGI Akiko, Offering Lists in the Burial Chamber of the Mastaba Tomb of Idut	88
YAGYU Toshiki, Bronze Socketed Arrowheads in the Southern Levant	117
HASHIZUME Retsu, Determination of the Title and Author of the MS Munich 378 ^c : Through comparison with MSS of <i>Mira'at al-Zamān</i>	140
SUZUKI Hideaki, A New Interpretation of the "Island of <i>Qanbalū</i> "	154
MIYAGI Miho, The Birth of "Western Europe" in Byzantine Historiography of the Eleventh and Twelfth centuries: The correlation between <i>ἐσπέρα</i> , <i>δύσις</i> and "Military"	171
ISHIKAWA Hiroki, The Origin and History of the District Archive of Braga MS779: New Light on its Importance in the Study of Northern Ethiopian History	187
Report:	
OGASAWARA Hiroyuki, The Controversy on Origins of the Ottoman State: 1916-2005	208
Brief Communications:	
NUKII Mari, Arab-American Community in Detroit: The Case of Dearborn	223
Book Reviews	229
New Publications	250
Correspondences	256

オリエント

第48巻 第2号



2005年

論 文

エン・ゲヴ遺跡 (イスラエル) の成立年代 セム諸語の語構造に対する一般言語学的アプローチ	杉本 智 俊 (1)
16-17世紀オスマン朝下の東部アナトリアにおける「ユルトルク=オジャクルク」と「ヒュクームト」の成立	高橋 洋 成 (28)
初期ガージャール朝とテヘラン ——宮廷の季節移動と首都——	齋藤 久美子 (47)
研究ノート エマルのニン・ディンギル任官式における行列の中の歌い手	近藤 信 彰 (66)
第二次立憲政期のアルバニア人 ——『ベサ Besa (誓約)』紙分析にむけて——	小坂橋 又 久 (87)
現代トルコのアレヴィーリキ ——アレヴィーの大衆向け雑誌における自己規定の様相——	石丸 由 美 (102)
現代ヘブライ語における歴史的シュワーの音響解析	若松 大 樹 (113)
	福盛 貴弘・池田 潤 (130)

学 界 動 向

文化財研究所によるバーミヤーン遺跡保存事業	岩井 俊 平 (145)
エジプト語国際会議参加報告	永井 正 勝 (160)

短 報

テル・ゼロール出土のランプと葬送儀礼	巽 善 信 (169)
--------------------	-------------

書 評

Jonathan P. Berkey, <i>Popular Preaching and Religious Authority in the Medieval Islamic Near East</i>	塚田 絵里奈 (173)
Gwyn Campbell (ed.), <i>The Structure of Slavery in Indian Ocean Africa and Asia</i>	鈴木 英 明 (179)

赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』	岡本 和 也 (186)
-------------------	--------------

新刊紹介

学会だより	(194)
-------	-------

総目次	(203)
-----	-------

	(251)
--	-------

日本オリエント学会

BULLETIN
OF
THE SOCIETY FOR NEAR EASTERN
STUDIES IN JAPAN
(NIPPON ORIENTO GAKKAI)

Vol. XLVIII No. 2

2005

CONTENTS

Articles:

- SUGIMOTO Tomotoshi: When was the City at Tel 'Ein Gev
Established?: A Study in Iron Age Chronology 1
- TAKAHASHI Yona: General Linguistic Approach for
Semitic Word-Structure 28
- SAITO Kumiko: Establishment of the *Yurtluk ve Ocaklık* and the
Hükümet in Eastern Anatolia from the 16th to the 17th Century 47
- KONDO Nobuaki: The Early Qajars and Tehran:
Seasonal Travels of the Court and the Capital City 66

Notes:

- KOITABASHI Matahisa: The Singers in the Procession of
NIN.DINGIR's Installation at Emar 87
- ISHIMARU Yumi: Albanians in the Second Constitutional Regime:
Publication Information about *Besa* 102
- WAKAMATSU Hiroki: The Self-Determinations of Alevilik
through Popular Periodicals of Alevis in Contemporary Turkey 113
- FUKUMORI Takahiro and IKEDA Jun: An Acoustic Analysis of
Historical Schwa in Israeli Hebrew 130

Reports:

- IWAI Shumpei: "Safeguarding of Bamiyan Site" Project carried out
by National Research Institute for Cultural Properties, Japan 145
- NAGAI Masakatsu: A Report on the Conference "After Polotsky:
New Research and Trends in Egyptian and Coptic Linguistics" 160

Brief Communications:

- TATSUMI Yoshinobu: A Lamp and the Funereal Ceremoy of
Tel Zeror 169

Book Reviews:

173

New Publications:

194

Correspondences:

203

- (18) Pollo S. & Pulaha S. (eds.) *Akte të Rilindjes Kombëtare Shqiptare* (『アルバニア民族復興期の史料』), Tiranë, 1978, 259-260.
- (19) 1908年11月14日-22日に開催。アルバニア人にとってのアルファベットの統一のために開催された。議長はミドハト・フラシャリが務め、シャーヒン・コロonya, ペトロ・ルアラスイ Petro Luarasi, ジェルジ・フィシュタ Gjergj Fishta ら, 帝国内外のムスリム, 正教徒, カトリック教徒アルバニア人が集結した。モナストゥル会議について, Elsie, *History*, 336-337; Skendi, 366-376. など。
- (20) Elsie, *History*, 338.
- (21) Sami Frashëri, *Shkronjëto e gjuhësë shqip* (『アルバニア語文法書』), 1886.
- (22) S. E. Mann, *An Historical Albanian-English*, London, 1948.

現代トルコのアレヴィーリキ
——アレヴィーの大衆向け雑誌における自己規定の様相——

The Self-Determinations of
Alevilik through Popular Periodicals of
Alevis in Contemporary Turkey

若松大樹^{*}
WAKAMATSU Hiroki

ABSTRACT This article explains how the Alevi revival movement has occurred since 1990s, and the process of the Alevi identity problems in contemporary Turkey. The Alevis, a heterodox religious minority, have in recent years organized Alevi associations throughout the country, as well as among migrant communities in Europe. At the same time, Alevi intellectuals and community leaders have set out to define the Alevi identity, tradition and history. I researched the emergence of an Alevi presence on mass media and what this emergence says about the expanding public discourse in contemporary Turkey.

The term 'Alevi' is complex and various meanings. The present discourse about Alevilik first emerged in 1980s. This emergence of Alevi discourse points up the complexities and difficulties in the emergence of various other discourses in Turkey. Questions such as 'what is the Alevi' are unavoidable in contemporary Turkish society.

The assertion of identity among Turkey's diverse religious and ethnic groups since the 1980's has taken on new dimensions through development of new communication channels, the expansion of the higher education system, and political and economic liberalization. New communication networks have aided the Alevi and Kurdish groups in their struggle for public recognition. With the help of new communication technologies, for example, the Alevis frame their local views in terms of universal concepts of human rights, democracy, and self-determination.

In this respect, I analyzed the Alevilik in popular periodicals published and available in Turkey. As a result, I defined three formations of *Alevilik*. The first one is the *original Kurdish* ethnicity or culture. The second one is a kind of *mezhep*. The third one is the *original Turkish* religion.

* 上智大学大学院博士課程
Ph. D. Candidate, Sophia University

はじめに

現代トルコにおいて、アレヴィー Alevi は、政治的・社会的・文化的な文脈で、重要な宗教的（あるいはエスニックな）人間集団を構成している。トルコ共和国では、宗教に関する人口統計が公表されないため、彼らの正確な人数は定かではないが、一般的にトルコ共和国の人口の約20%を占めているといわれている。⁽¹⁾

本稿の目的は、トルコにおける社会的・文化的・政治的文脈の中で、複雑に、そして多様な様相を呈している「アレヴィー性＝アレヴィーの信仰＝アレヴィーリキ Alevilik」に注目し、大衆向け雑誌において繰り広げられているアレヴィーリキが、どのように機能しているのかを検討することによって、アレヴィーたちが主張している自己規定の様相を明らかにすることである。

アレヴィーをめぐるこれまでの社会学的先行研究で代表的なものに、佐島、シャンクランド D. Shankland、ブライネセン M. van Bruinessen そしてフォーホフ K. Vorhoff やヤヴズ H. Yavuz の研究がある。⁽²⁾

こうした研究は、これまで起源論的な歴史研究が主流であったアレヴィー研究に、構築主義的な理論分析の枠組みを与えた。

そうした研究の分析対象は多様であるが、概ね2つのアプローチに分類できる。第1には、シャンクランド、ブライネセン、そして佐島の研究に代表されるような研究がある。このアプローチによる研究は、自らが行なった社会のフィールドワークを通して、その社会で機能しているアレヴィー概念の一端を捉えようと試みている。この研究の特徴は、研究者がフィールドワークを行なった社会において見られる儀礼や慣習の分析から、アレヴィーリキがどのように共同体内において機能しているかを明らかにすることを目的としている。こうした研究において取り上げられている共同体は、村やアレヴィーが運営する文化協会のように、対面的な関係が主流の集団である。そして第2には、フォーホフやヤヴズに代表される現代トルコにおけるメディアを分析対象とした言説研究がある。フォーホフの研究は、現代トルコにおいて出版されているアレヴィー関係の出版物の動向を押さえ、それら出版メディアで繰り広げている多様な主張を整理し、アレヴィー概念の全体像を明らかにすることを試みている。一方ヤヴズは、現代トルコのメディアの発達によって広がった公共圏において形成されたアレヴィー概念の機能を論じている。⁽³⁾

本稿では、アレヴィーの文化協会によって出版されている大衆向け雑誌の出版動向を明らかにした上で、フォーホフやヤヴズの研究を継承しつつも、彼らによってまだ議論されていない、大衆向け雑誌におけるアレヴィーたちの自己規定に関する主張に注目し、

それらメディアにおけるアレヴィーリキをめぐるせめぎあいの中で、どのようにアレヴィーリキが機能しているかを明らかにする。本稿では、特に集団の名称に注目し、アレヴィー概念の一端を明らかにしていく。

I. アレヴィーをめぐる出版物の増加とその背景

建国以来、徹底した世俗化を目指してきたトルコ政府は、長らく国民の間に息づいてきたイスラーム的な伝統を政治の領域から排除し、反国家的なイスラーム運動を時には武力を用いて弾圧してきた。他方の少数派の問題に関しては、クルド人やアレヴィーなどの少数派に対して徹底した同化政策をとってきた。この政策の背景には、「トルコ国民」としてのトルコ人概念と、エスニック集団としての「トルコ人」概念が合致するというトルコ政府の考え方が存在する。

1970年代、トルコ国内におけるイデオロギー的状况は右傾化の一途をたどっていた。それまでトルコ共和国の精神的基盤は中道左派である共和人民党 CHP によって支えられたアタテュルク主義であった。その一方で、民衆の間では、トルコ人＝スンナ派ハナフィー派対クルド人＝クルディスタン労働者党 Partiya Karkeren Kurdistan (以下、PKK) というイデオロギー的状况が形成され、アレヴィーたちは双方に馴染めず、次第にそれらへの反発としてマルクス主義イデオロギーを頼るようになり、左傾化した。⁽⁵⁾

宗教（イスラーム）とトルコ民族主義との間に生じたジレンマを克服することと、当時の知識人のほとんどが左派系に傾いていた状況を打破するために、トルコ＝イスラームの総合論が、少数のトルコ・ナショナリスト知識人たちの組織である「知識人の炉辺 Aydınlar Ocağı」によって提唱された。それは、トルコ民族主義とイスラームとの両立を強調した、多分に政治的な意味を持った思想であり、社会主義に対するアンチ・テーゼとして表明されていたに過ぎなかった。⁽⁶⁾

1980年代からのイスラームに対するトルコ政府の公式見解は、イスラームを重視する社会一般の風潮を受けて、積極的にトルコ＝イスラームの総合論を宣伝することによって、宗教＝イスラームとトルコ民族主義との間に生じたジレンマを克服しつつ、いわゆる「ケマリシ的な伝統」からの脱却をかかげながら、大きな発展を遂げた。

こうした状況の中、アレヴィーに関してトルコ政府が抱えていた2つの大きな問題がある。第1には、厳格なイスラーム復興の動きである。トルコ＝イスラームの総合論の影響によって本格化し始めたスンナ派のイスラーム復興の動きが大きな影響を及ぼし、トルコ＝イスラームの総合論が次第に社会的・政治的な文脈で説得力のある思想として発展し、ついには政府の公式イデオロギーとしての立場にまで高められたのである。それまでトルコ共和国においては、「宗教教育」というものは個人の自由選択的な問題であった。

しかし、宗務庁 Diyanet İşleri Başkanlığı は、それを義務化しようと試み、各地に新しいモスクを建設し、それぞれのモスクにイマームを配置した。それはスンナ派の町や村だけでなく、アレヴィーたちの共同体にもおよんだ。

このように政府は、政治化するイスラームを弾圧する一方で、穏健なイスラームには広く活動する余地が与えられたが、スンナ派イスラームによる過度のイスラーム復興の動き、すなわちトルコ共和国の国家体制そのものを脅かしかねない動きへの発展を妨げるために、「政治的な」イスラームに対抗する動きとして、信仰としては周縁的であったアレヴィーたちに、広い活動の余地が与えられるようになった。

第2には、PKKの動きが活発化したことである。PKKは1980年代の終わりまでに、国内外のクルド人たちの支持を得ており、そういった支持基盤がスンナ派のクルド人だけでなく、アレヴィーのクルド人にも広がる可能性があった。⁽⁷⁾ 実際に1980年の軍事クーデター以降、トルコ系はもちろんクルド系のアレヴィーたちもまた、全国で積極的に組織化を始めた。⁽⁸⁾

そこで政府は、クルド系もトルコ系も、アレヴィーは1つの集団であると見なすことによつて、民族問題を棚上げにする一方で、アレヴィーを「宗派」ではなく「エスニシティ」とみなす態度を打ち出し、スンナ派のアレヴィーに対する反感を和らげながら、アレヴィーたちの活動範囲の拡大を容認し、さまざまな政策を打ち出すことで、クルドの民族的統合の機運と過度のイスラーム復興運動に水を注そうと目論んだ。⁽⁹⁾

こうした状況の中、ソビエト連邦が崩壊し、トルコ国内における学生を中心とする左翼主義運動が下火になり、頼るべきイデオロギーを失ったのに加え、現代トルコ社会におけるマスメディアの技術的な発展という大きな社会変化が加わり、アレヴィーたちはとりわけこうしたメディアを通じて、自分たちの存在を今まで以上に自己主張するようになったのである。

アレヴィーたちに対してもたらされた、こうした社会的変化の一つの重要な効果は、「宗教」としてアレヴィーリキを捉えていくという、アレヴィーの人々の興味を喚起した点である。アレヴィーたちは、彼らのアイデンティティの定義に関する議論の場を設け、そうしたさまざまな議論を通して、大量の出版物が現れ始めたのである。こうした状況の変化を受けて、アレヴィーリキの歴史や教義、儀式やアレヴィーとスンナ派との関係について論じた出版物の数は、以前にも増して増大した。

そのような出版物の多くは、アレヴィーリキはイスラームのセクトに含まれるのか、あるいは本質的には全く違う宗教なのか、またアレヴィーリキはイラン起源なのか、それともトルコ起源なのかといったテーマについて論じるものであった。では、一般的にどのような議論があったのであろうか。以下に引用する雑誌の記事は、この当時のアレ

ヴィーに対するトルコ政府の一般的認識を物語るものである。

『アレヴィー』という概念は、19世紀以降クルバシュ、⁽¹⁰⁾ タフタジュ、⁽¹¹⁾ ベクタシなどの共同体を示す語として使われ始めた。今日、『アレヴィー』と云って定義されるグループの背景を構成しうこの語の使用は、昔とは異なる。…中略… 異なった宗派間の対立要素が「共同体内に」もたらされたため、アレヴィーリキは神秘主義的な要素を持っている。そのような意味で、アレヴィーは『メタドクス (=オーソドクスでもヘテロドクスでもない)』と云える。⁽¹²⁾

II. フォーホフの研究と本論文の射程

現代トルコにおけるアレヴィーリキに関する出版物に、早くから注目して研究を行ったのが、フォーホフである。フォーホフはそれらの出版物を、学術的なものと大衆的なものとに区別し、それらを比較検討している。それによれば、1980年代の後半頃から、従来はタブーであった少数派問題などの話題に関する報道規制が緩和され、ディスクールの波となってアレヴィーリキに関する出版物が増加し始め、アレヴィーリキというひとつの話題が公の場で議論されるようになったという。アレヴィーたちは、かつては秘儀であった自らの宗教儀式や教義について、出版物などを通じて公に語るようになった。少なくとも1970年代以前にこのようなことを行えば、共同体内から排除され、追放された。⁽¹³⁾ しかしアレヴィーリキは今日、もはや秘儀ではなく、「アレヴィーとは何か」という命題は、トルコの社会生活や政治生活を語る上で避けられない問題となっている。そうした重要性は、現在トルコ国内で出版されているおびただしい数の出版物における、アレヴィーリキに関する議論を見れば明らかである。

1970年代以前のアレヴィーリキに関する出版物は、とりわけベクタシ教団の歴史研究に主眼に置いた、学術的な色彩を帯びた出版物が多かったとフォーホフは述べている。さらに、全出版物に占めるアレヴィーリキに関する出版物の割合も、現在に比べると極端に少なかったとしている。しかし、最近ではこれとは対照的に、こうした学術的な研究よりもむしろジャーナリスティックな、あるいは大衆向けの出版物が多く現れたという。こうした出版物は、アレヴィーの歴史や文化、宗教や共同体社会についての理解を他者に啓蒙することにねらいを定めている。とりわけ1980年代後半から、アレヴィーリキに関する出版物を扱う出版社が次々と設立され、トルコの有力な新聞紙上でも話題を博すようになったのである。⁽¹⁴⁾

フォーホフの研究は、出版物の一覧を挙げて、大衆向けと学際的なものに分類をし、それらの傾向に差異があることに関しては言及しているが、それらの差異の性質に関しては分析していない。つまりフォーホフの研究では、大衆向け雑誌の間、あるいは学際

的な出版物の間に生ずる傾向の差異に関する詳しい分析がされていないのである。

本稿では、フォーホフの研究の不足を補うための出発点として、大衆向け雑誌に注目し、それら雑誌の中で主張されているアレヴィーの自己規定の様相を通して、傾向の差異を明らかにし、大衆向け雑誌に現れるアレヴィーリキの様相を分析する。本稿でこれらの雑誌を「大衆向け」と性格づける根拠は、第1に写真などの掲載が多く、文章が平易であること、第2に、掲載されている文章の内容が、トルコ語の学術論文の体裁をとっていないことである。無論、学際的な色彩を帯びた出版物（特に書物）も分析の対象となりうるが、現在おびただしい量の出版物が出現しては消滅していることや、さらにそれらの出版物は、出版元および販売店が限定されている上、それら全てを網羅することが困難であるため、本稿では傾向を比較的網羅しやすい、大衆向けの月刊誌に焦点を絞った。こうした月刊誌や一般紙は、学術的な色彩を帯びた出版物に比べ、より単純化された形でアレヴィーリキに関する自己規定の在り方が現れている。ちなみにそれらの雑誌はトルコ本国だけでなく、ドイツやオランダなどトルコ系移民の多いヨーロッパ諸国においても簡単に手に入れることができる。

【表】 本稿で扱うアレヴィーの大衆向け雑誌

雑誌名	文化協会名または出版社名	本稿での使用期間
<i>Munzur</i>	Kalan Yayınları	2000.7-2001.3
<i>Yol</i>	Hüseyin Gazi Derneği	1999.8-2002.1/2
<i>Ehli Beyt</i>	Dünya Ehli Beyt Vakfı	2001.10-2002.3
<i>Pir Sultan Abdal</i>	Pir Sultan Abdal Kültür Derneği	2000.5-2002.9/10
<i>Şahkulu Sultan</i>	Şahkul Sultan Kültür Derneği	2000.5-2002.10
<i>Karacaahmet Sultan</i>	Karacaahmet Sultan Derneği	2000.5-2002.1
<i>Hoca Ahmet Yesevi Ocağı</i>	Ahmet Yesevi Kültür Derneği	2000.5-2001.9/10
<i>Cem</i>	Cem Vakfı	2000.5-2002.8
<i>Genç Erenler</i>	Genç Erenler Vakfı	1998.5-1999.3/4

※ トルコ共和国宗務庁データおよび Cemal Şener, *Alevilik Üstüne Düşünceler*, ANT Yayınları, İstanbul, 1994参照の上筆者作成。

現代トルコにおいては、上記表に挙げた9つの文化協会以外にも、アレヴィーの運営する文化協会は存在するが、本稿では、大衆向け雑誌を出版している文化協会によって出版されている雑誌と、過去に大衆向け雑誌を出版していた文化協会で、経済的理由などで出版を休止しているが、今後出版を検討している文化協会の大衆向け雑誌のものを、資料として使用する。

III. 「クルド的なもの」としてのアレヴィーリキ

最初に紹介するのは、本稿で「クルド的なもの」としてのアレヴィーリキに分類されるような主張をしている月刊誌『ムンズル *Munzur*』である。本稿で取り上げる9誌のアレヴィーリキに関する雑誌の中で、この雑誌が唯一他の雑誌とは異なった立場を主張している。すなわち、アレヴィーリキに関する雑誌の中では、極めて稀な主張をしている雑誌とみなすことができる。

この雑誌が他の雑誌と際立って異なる点は、アレヴィーリキを信仰としては扱っていないということである。なぜなら、この雑誌によく散見されるトピックは、アレヴィーリキを信仰のあり方など宗教的な事柄としてとらえているわけではなく、トゥンジェリ Tunceli などの東部アナトリア諸県の周辺にある村の民族誌としてとらえているからである。

この雑誌を運営する出版社「カラン出版 Kalan Yayınları」は、アンカラにその本社を置き、イスタンブルとメルスィン、それにオランダのアムステルダムにも支部を置いている。『ムンズル』誌の初刊は2000年7月で、以来2001年3月までの段階で第9号まで出版されている。同出版社の代表はメスト・オズジャン Mesut Özcan である。トルコにおける販売価格は2001年3月現在一冊2,000,000トルコリラ（約180円）で、EU諸国における販売価格は一冊5ユーロ（約600円）である。

この雑誌のサブタイトルには、「デルスィムの民族誌」とある。デルスィムとはトゥンジェリのクルド語名であることからわかるように、アレヴィーリキのクルド性を謳っている。雑誌の構成としては、毎号にわたって東部アナトリアのある村における村落史から始まり、その村がいかに中央政府から弾圧を受けてきたかということから始まる。そして後半では、クルド系諸語で書かれた詩が引用され、クルド諸語の一つであるザザ語で書かれた記事が掲載されている。これらに引用されている詩は、前に述べた村落史を描くときに用いられている。その中で、アレヴィーリキは彼らの生活習慣のあり方や、一種のモラルのようなものとして扱われているのである。そして、少なくとも彼らが考えているアレヴィーリキに内在するクルド的な特徴を強調し、「クルド文明」の重要な構成要素としてアレヴィーリキを扱っている。

この雑誌の中の記事で最も興味深いのは、東部アナトリア地域の呼び名の起源をシリーズとして掲載している点である。この記事は、初刊から第7号にわたって掲載されているもので、デルスィム周辺の村あるいは東部アナトリア地域の呼び名すべてがクルド諸語を起源としていることを主張している。以下にその例を挙げる。

『バス (Basu)』とは、トゥンジェリからマズギルドへ向かう途中にある、現在のアクバサル周辺の村々の昔の呼び名である。ペルシャ語、あるいはクルド語で Ba (風) と、Su (場所) を意味する… 中略 … またクルド語では、この『バス』は、『雪を保っている場所』を意味することもあるが、これに関しては確証のもてる情報は無いので、よく考えなければならない。』⁽¹⁵⁾
(「デルスィム周辺における場所の呼び名の起源 3」より)

「ビンギョル Bingöl とは、アナトリアにある 1 つの都市の名前である。エルズルムの南にある山地にもビンギョルという地名がある。モンゴル人は、13 世紀に小アジアにやってきたとき、ミンギョル Ming-Köl という名を与えた。このモンゴル人たちの与えた名が、今のトルコ語に入ってビンギョルとなっている。しかしそれ以前は、ビンギョルはチャパクチュル Çapakçur という名であった。昔のザザ人やクルド人はこの名で呼んでいた。」

⁽¹⁶⁾
(「アナトリアの地名の起源 2」より)

また、『ムンズル』第 3 号には特集でザザ語のアルファベットや文法解説がトルコ語でされており、読者対象をトルコ人、クルド人として幅広くとってある。これは、この雑誌の目的がザザないしはクルドの理解を求めるものであり、同時に自らがトルコではないことを主張しているのである。さらに、少なくともトルコ国内の住むクルド系の人々の間で、共通語としてトルコ語が用いられることが多いことから、共通語としての「クルド語 (ザザ語)」の啓蒙を意図していることも考えられる。

さらに、『ムンズル』以外のアレヴィー関係の雑誌には、必ずハジュ・ベクタシ・ヴェリ Hacı Bektaş Veli に対する崇敬に関する記事が現れるが、この雑誌『ムンズル』には自己規定の要素として現れてこない。ハジュ・ベクタシ・ヴェリは、「トルコ人」の聖者として多くのアレヴィー集団に崇敬される聖者であり、13 世紀にホラサーン地方からアナトリアにやってきたベクタシ教団の名祖として知られる。後述するトルコ系のアレヴィーたちが主張するアレヴィーリキとは違い、『ムンズル』が主張するようなアレヴィーリキは、アレヴィーとベクタシとの関わりを否定している。

「全てのタリーカには、導師 Pir あるいはそれにあたる指導者がいるものである。導師が亡くなれば、たいていの場合そのタリーカに所属する人々によって選ばれるか、導師の許しを得た者が次の導師になる。しかしアレヴィーはタリーカではないので、そのようなことはない。デテ (アレヴィー共同体の長老・指導者) が亡くなればその息子がデテになる。アレヴィーリキに導師は存在しない。導師とは、タリーカを作った者あるいはその教義を伝授された者である。ハジュ・ベクタシ・ヴェリは確かに 1 つのタリーカの導師である。… 中略 … タリーカは、ベクタシ教団も含むが、昔から国家の保護の下に成り立っていた。しかしアレヴィーたち

はといえば、常に政府から差別されてきた。」

⁽¹⁷⁾
(「アレヴィーリキ・シーア派・ベクタシの関係」より)

前にも述べたように、この雑誌は現代トルコにおいて出版されているアレヴィーに関する大衆向け雑誌の中では、極めて稀な主張をする大衆向け雑誌である。にもかかわらず、このタイプのアレヴィーリキが、現代トルコにおいて、特に多くの非アレヴィーのトルコ人によって重要であると思われるのは、アレヴィーリキとしては、極めて主流な考え方となっている。

そうした現象を顕著に表す例として、以下に事例を挙げて論じる。以下の事例は、現代トルコにおけるイスラーム系高級紙『ザマン Zaman』紙に掲載された記事で、アレヴィーはイスラームではなく、イデオロギーであると主張する。そして第 IV 節で述べる世界エフリ・ベイト基金理事、フェルマニ・アルトゥン Fermani Altun を以下のように言っている。

「世界エフリ・ベイト基金理事長フェルマニ・アルトゥンは、ハジュ・ベクタシ・ヴェリを誤って理解している。イスタンブルで行われたハジュ・ベクタシ・ヴェリ追悼式典で、『アレヴィーの若者は宗教の教育を受けてこなかったため、無神論者になってしまった。アレヴィーリキはなぜ学校で学ばれないのか?』という発言をした。… 中略 … しかしハジュ・ベクタシ・ヴェリの哲学と宗教は、もともとアレヴィーリキとは無関係である。アレヴィーリキは宗教でも哲学でもない。ましてイスラームでもない。」⁽¹⁸⁾

このように、『ザマン』紙は、後述する「トルコの信仰の在り方」としてのアレヴィーリキを否定し、ハジュ・ベクタシ・ヴェリに対する崇敬はアレヴィーリキとは無関係であると主張している。つまり「民族的」アレヴィーリキの自己規定の主張と、それに呼応する非アレヴィー側からのアレヴィーリキに関する理解が一致しており、逆に多くのアレヴィーたちの自己規定の主張である「トルコの信仰の在り方」としてのアレヴィーリキに関する非アレヴィー側の主張は呼応しないことも注目に値する。

IV. 「トルコの信仰の在り方」としてのアレヴィーリキ

この節では、現代トルコにおけるアレヴィーの主張として主流になっているアレヴィーリキである、「トルコの信仰の在り方」としてのアレヴィーリキを紹介する。こうした傾向は、月刊誌『カラジャアフメット・スルタン Karacaahmet Sultan』、『ジェム Cem』、『ピール・スルタン・アブダル Pir Sultan Abdal』、『エフリ・ベイト Ehl-i Beyt』、『シャークルスルタン Şahkulu Sultan』、『ホジャ・アフメット・イェセヴィー・オジャーウ Hoca

Ahmet Yesevi Ocağı』,そして『ヨル Yol』のような、現代トルコで出版されているアレヴィーによる文化協会の雑誌の多くに見られる傾向である。

この傾向の雑誌には、ベクタシ教団の聖者、ハジ・ベクタシ・ヴェリに対する崇敬が多く記述されており、「トルコ人の真の信仰」あるいは「トルコのイスラームの在り方」としてアレヴィーリキを主張している。アレヴィーリキに関する歴史認識においては、イスラーム化以前のトルコ人の信仰が、イスラームを受容し、それこそが「トルコ民族」の真の信仰の在り方であり、アレヴィーリキであると主張し、自己規定している。

最初に紹介するのは、月刊誌『カラジャアフメット・スルタン』である。この雑誌を出版しているカラジャアフメット協会は、現代トルコにおけるアレヴィーの文化協会の中でも歴史が古く、月刊誌『カラジャアフメット・スルタン』の初刊は、1995年2月である。本部はイスタンブルにあり、本部建物のほかに、アレヴィーを自称する多くの人々が崇敬する聖者、カラジャアフメット・スルタンの聖者廟も併設している。同協会の代表は、ムハッレム・エルジャン Muharrem Ercan であり、月刊誌の販売価格は1,500,000トルコリラ（約130円）である。

以下の引用は、毎年中部アナトリアにあるハジベクタシ村において盛大に催される、ハジ・ベクタシ・ヴェリ追悼式典の様相を記述する記事である。

「ハジ・ベクタシ・ヴェリ追悼記念祭は、毎年ハジベクタシ村で行われます。このハジベクタシ村で、アレヴィーたちにとって最も偉大なビール Pir（導師）、ハジ・ベクタシ・ヴェリの御前で行われる祭は、他の祭と区別しなければならない特別なものです。」

(19)
〔ハジ・ベクタシ・ヴェリ追悼記念式典にて〕より〕

また、上と同様の傾向の見られる月刊誌『エフリ・ベイト』の記事を以下に引用する。この雑誌の初刊は2001年3月に出版され、この雑誌を出版運営する世界エフリ・ベイト基金 Dünya Ehl-i Beyt Vakfı は、代表をフェルマニ・アルトゥンとし、イスタンブルに本部を置き、トルコ国内だけでなく、ドイツにも1つ支部を置いている。また、雑誌の販売価格は、2,500,000トルコリラ（約220円）である。

この雑誌の主張するアレヴィーリキは、真のトルコ人ムスリムのありかたであると自己規定しながら、その信仰としてのアレヴィーリキは「預言者一族」の正しい信仰を守ることだと強調している。また、その「トルコ性」に深く関わっているのが、ベクタシ教団の聖者、ハジ・ベクタシ・ヴェリであり、彼は「真のトルコ語」をはじめ、宗教的寛容や平和をアナトリアもたらした人物で、神聖な人物であるとしている。以下にそれらを示す引用を2つ挙げる。

「アレヴィーの宗教的自己規定は、イスラームの預言者一族のもっていたそれと同じものである。アレヴィー、ベクタシ、ジャーファル派⁽²⁰⁾、シーア派、スンナ派のような言葉は、突き詰めれば、全て同じ概念なのである。」

(21)
〔アレヴィーたちの宗教的自己規定〕より〕

「ハジ・ベクタシ・ヴェリは神聖で、アナトリアに『真のトルコ語 Öztürkçe』を、平和を、愛を、寛容をもたらした。」

(22)
〔世界エフリ・ベイト基金理事長フェルマニ・アルトゥンはこう言った〕より〕

トルコのムスリムでありながらも、イスラーム化以前の「古代トルコ人」の信仰を継承している信仰として、アレヴィーリキを主張している雑誌に、月刊誌『ジェム』がある。『ジェム』を出版運営するジェム基金 Cem Vakfı は、トルコにおけるアレヴィーの運営する文化協会では最大級の規模で、基金の代表は、イッゼッティン・ドアン İzzettin Doğan で、イスタンブル市に本部を構え、また同市だけでも9つの支部を持っている。また、トルコ国内各所に支部があるだけでなく、海外においても多くの支部があり、トルコ系移民の多く住むドイツ・オランダ・スイスだけでなく、アゼルバイジャンにも支部がある。さらに同協会はラジオ局（ジェム・ラジオ Cem Radyo）も運営しており、その規模は大きい。雑誌の販売価格は、トルコ国内では1,500,000トルコリラ（約130円）で、ユーロ、オーストラリアドルでも価格表示がしてある。この雑誌の歴史は古く、初刊がすでに1992年4月に出版されている。

この雑誌のアレヴィーリキに関する主張の特徴は、アレヴィーリキの起源が中央アジアのイスラームであるというものである。

それらによれば、アレヴィーリキとは純粋で潔白な信仰であり、真の「トルコ人」の信仰であるという。そしてそれらの雑誌は、アラブ人の宗教（スンナ派の過激派が主張するイスラーム）に汚されていない、純粋で寛容な「トルコ人」の正しきイスラームの信仰であると主張する。

以下には、現代トルコで出版されているアレヴィーの雑誌の中では有力な月刊誌『ジェム』がアメリカの同時多発テロを受けて、イスラームについての見解を示した記事を引用する。

「イスラームといえば、多くの人々がテロを連想するであろう。なぜなら今日の世界では、ヒズブッラーやビン・ラーディンなどのスンナ派が、過激な運動をともなって、すべてのムスリムを代表するかのようになり、多くの人々に考えられてきているからだ。これはとても悲しいことである。こうした危険な人々〔イスラーム過激派〕が、自分たちのイスラームをアッラーの信仰だと偽って、自らの利益や感情のために信仰を利用している。彼らは本当のムスリムではな

い。彼らには本当の信仰など理解できないのだ。… 中略 … 平和、寛大さ、良心を持っていることこそが、真の信仰者である。自分たちに、そして他の人たちへの愛や哀れみの心を与えることを躊躇している場合ではない。」

(23)
〔「イスラームとテロ」より〕

月刊誌『ジェム』は、「真の信仰者」であるハジュ・ベクタシ・ヴェリというイスラームの聖者と並んで議論になっているのは、古代トルコ人の宗教 Eski Türk Dini とシャーマニズム Şamanizm である。『ジェム』は、アレヴィーリキが中央アジアのイスラーム化以前におけるトルコ人の信仰に由来し、それらが真の信仰たるイスラームを受容することによって形成された真の「トルコ人」の信仰であり、真のイスラームであると主張している。以下にそれを示す一例を挙げる。

〔われわれの先祖たちは、〕遊牧民になったことが原因で、イスラーム以前のトルコ社会の歴史と関係のあるまともな文献を見つけることは多くの困難を背負い込むことになっています。ご存知のように、遊牧民社会は印刷文化に到達できず、そのため今日、我々は我々自身に関する文献を発見できていないのであります。馬やラクダのような動物たちを引き連れて、草原や砂漠をあちらこちらと彷徨いながら戦争をし、戦利品を求めて放浪して生計を立ててきた結果、その社会自体のことについて記録した文書はありえないのです。この原因と関係のある事柄を、定住社会の文明から学んでみましょう。

古代トルコ人と関係のある事柄を、定住社会である中国、ビザンツ、アッシリア、イラン、そしてアラブから学んでいきましょう。これらの文明の文化水準は、古くから非常に高いものでした。学校やメドレセで歴史、哲学、数学、法学、自然科学などの学問が教えられていました。しかし、こうした文化水準のことは別として、我々は客観的に歴史を捉えなければならないでしょう。例えば、こうした外国の史料からでは、トルコ人が野蛮で戦争好きだという印象を受けてしまうからです。また、こうした研究はただ待っているだけではなく、自らの手で進んで取り掛からなければならないでしょう。

トルコ史の観点からも同様の判断が有効でしょう。イスラーム以前の時代だけでなく、イスラーム教を受容してから後も、トルコ史と関係のある事柄が書かれた重要な文書は、外国のものであったわけです。」

(24)
〔「古代トルコ人における宗教」より〕

さらにこの雑誌には自らの信仰の起源をより正統的なものとするために、メリコフ I. Mélikoff のようなヨーロッパ人研究者が成した研究論文を引用し、彼らは自らのアイデンティティ再構築の材料としている。

その一方で、スンナ派との違いを強調し、スンナ派が「外国の宗教」であり、「トルコ人の宗教」ではないことを主張している。

同様の傾向を示す雑誌、『ヨル』がある。月刊誌『ヨル』を出版運営する、ヒュセイン・ガズイー協会 Hüseyin Gazi Derneği は、アンカラ本部を持ち、イスタンブルにも支部があるが、ジェム基金などに比べると規模は比較的小さい。以下に、『ヨル』が主張する「トルコの」信仰としてのアレヴィーリキの例を引用する。

「トルコのアレヴィーリキは、シーア派とは何の関わりもない。また、信仰の観点から見れば、トルコにおけるスンナ派とも関わりはない。1つのメズヘブでもない。アレヴィーリキとは、トルコの民衆の心の中に流れる基本的な信仰である。… 中略 … ただ、一部の無神論者は、アレヴィーリキをイデオロギー的方向性で考えている。これは間違いである。アレヴィーリキはアナトリアの伝統的信仰で、普遍的なものである。」

(26)
〔「アレヴィーの存在」より〕

以上に述べてきた、「トルコの信仰の在り方」としてのアレヴィーリキは、イスラーム化以前のトルコ人の信仰を継承し、その信仰がイスラームを受容した、「真のトルコの信仰」として、多くのアレヴィー関係の大衆向け雑誌が主張している。本稿で取り上げた9誌のうち7誌が、アレヴィーリキをこうした形で自己規定している。

V. 「メズヘブ」としてのアレヴィーリキ

この節では、アレヴィーリキをイスラームのメズヘブの1つとして捉えている月刊誌『ゲンチ・エレンレル Genç Erenler』を紹介する。この月刊誌は、トルコにおけるアレヴィーリキに関して極めて稀な主張をする雑誌である。

この雑誌を運営するゲンチ・エレンレル基金 Genç Erenler Vakfı アンカラに本部を持ち、他には支部も存在しない規模の極めて小さな文化協会である。さらに月刊誌『ゲンチ・エレンレル』は、1999年以降財政難により出版されていないが、協会自体は現在も存続し、今後再刊も検討中とのことである。

この雑誌の主な狙いは、自らをスンナ派であると位置付け、スンナ派との融合や協調を図ることである。彼らのもっとも重要な主張は、スンナ派とアレヴィーとの間にある誤解や偏見を取り除き、真の信仰のあり方を考えるというものである。以下にこの雑誌の記事から一例を挙げる。

「ここ10年くらいの間、現代トルコにおいてアレヴィーリキはさまざまな場面において議論されてきた。しかしながら、これだけの議論があるにもかかわらず、アレヴィーリキをゾロアスター教の一種やら、イスラーム以外の宗教のひとつなどと考える人もいる。アレヴィーたちの中にも自分たちを無神論者だとか、背教者 *gavur* だとか自称する人間も現れた。しかし、賢明なトルコ人たちはそうは思わないはずだ。アレヴィーリキを真のイスラーム（スンナ派のイス

ラーム)と認める人たちこそ、真のムスリムといえるのであり、アッラーの望みし幸福の下で暮らすことができるのだ。」

(27)
〔イスラームを除いたアレヴィーリキはありうるか?〕より)

以上の記事の一例に見られるように、彼らはあくまで自らを「真のムスリム」として強調している点である。またそうした主張は、対象を国内にいるスンナ派ムスリムに限定している節が見受けられる。さらに自らをムスリムであると位置づけている記事を下記に挙げる。

「トルコでは、スンナ派ムスリム Sünni Müslümanlar とアレヴィー・ムスリム Alevi Müslümanlar との間に違いがある。我々の敵はこの違いなのである。最近、『自分は無神論者のアレヴィーだ』あるいは『アリー無しのアレヴィーだ』などと言って本を書いている人々がいる。彼らはアレヴィーリキ、アレヴィーたちという言葉を使って、トルコを混乱させたがっている。」

(28)
〔アレヴィーたちとスンナ派〕より)

以上のように、スンナ派ムスリムとアレヴィー・ムスリムという対比が、トルコのイスラームの在り方として規定されている。

この雑誌には、他にもイエシル・ホジャ Yeşil Hoca という聖者に対する崇敬を通してカーディリー教団との協調を訴える記事が掲載されている。⁽²⁹⁾ また、この雑誌にはトルコ各地の聖者廟への巡礼情報が掲載されており、その聖者は別段アレヴィーのみに崇敬されている聖者だけではなく、アレヴィー、スンナ派ともに崇敬している聖者の廟が紹介されている。また、そうした巡礼地周辺の観光スポットなども毎号にわたり掲載されており、読者対象をアレヴィーだけでなくスンナ派にも広げていることがうかがえる。

この雑誌が主張するアレヴィーリキの自己規定で重要なのは、自らをイスラームにおけるメズヘブ (=スンナ派の法学派の一部) であると主張している。

「我々が知っているように、我々はエフリ・スンネット Ehl-i Sünnet (スンナ派)のメズヘブである。… 中略 … 祈りも同じ、断食も同じ、犠牲祭も同じなのだ。では、アレヴィーリキとは何か? アレヴィーリキとは聖アリーの教えに従い、聖アリーのようになりたいと願う人々の持っている生き方 meşrep なのだ。」

(30)
〔アレヴィー=スンニーの同胞性〕より)

イスラームの要素として、自らがメズヘブであるという極めて特殊なアレヴィーリキの自己規定の在り方が、この雑誌の最も重要な主張である。ただ、この雑誌のアレヴィーリキの自己規定の中には、スンナ派法学派の一部として、イスラームの枠組みに自ら

を組み込んではいないが、第IV節で述べてきたような「トルコ性」を組み込もうという試みは行っていない。さらに同誌は、聖者の聖性も巧みに利用し、イスラームの中に自らを位置付ける試みを行っている。

結 び

本稿では、大衆向け雑誌上におけるアレヴィーたちによるアレヴィーリキの自己規定に関して、異なる理解が存在することを示した。本稿で取り上げたのは、一般向けに語られる大衆を対象とした知識人による「語り」である。そうした理解は、社会・政治・文化的なさまざまな文脈で、多様に機能している。

1990年代、国家と少数民族をめぐる人類学的な議論が盛り上がりを見せた。しかしそこでの議論の問題点は、「名付け」の主体である国家 (=政府) は、住民に対してそのアイデンティティが一枚岩であることを求めるため、「名づけ」の主体は多様ではありえないが、住民あるいは少数派の側からの「名乗り」が多様性を帯びていることに言及されていない点である。確かに名和が示している通り、「名付け」と「名乗り」の間にずれが生じることには言及できるが、「名乗る」側の自己規定の在り方は、極めて多様であることが、本稿で取り上げてきたアレヴィーリキをめぐる議論で明らかになった。

今後の研究の課題としては、学術に近い体裁を帯びた、アレヴィー知識人自身による書籍および大衆向け出版物における表象の連関性にも注目し、「名付け」と「名乗り」の対応とずれ、すなわちバランスの違いが、いかに生じるかということ、研究することが必要であろう。また、実際の対面的な状況下での「名付け」と「名乗り」も視野に入れながら、より実証的に検証する必要がある。

注

- (1) M. Ruth, "Alevi," in P. Mattar et al. (eds.), *Encyclopedia of the Modern Middle East*, Vol. 1, Leiden 1996, 89-91.
- (2) 佐島の研究は、佐島隆「アナトリア・トルコにおける基層的信仰の一樣相」日本宗教学会『宗教研究』67/4, (1994), 220-222. シャンクランドの研究は、D. Shankland, "Anthropology and Ethnicity: The Place of Ethnography in the New Alevi Movement," in T. Olsson et al. (eds.), *Alevi Identity: Cultural, Religious and Social Perspectives. Papers Read at a Conference Held at Swedish Research Institute Istanbul*, Istanbul: Swedish Research Institute in Istanbul, 1998, 15-22. ブライネッセンの研究は、M. van Bruinessen, "Kurds, Turks and the Alevi Revival in Turkey," *Middle East Report* 26/3 (1996), 7-10. フォーホフの研究は、K. Vorhoff, "Academic and Journalistic Publications on the Alevi and Bektashi of Turkey," in Olsson et al.

(eds.) *Alevi identity*, 23-50. ヤヴズの研究は, H. Yavuz, "Media Identities for Alevi and Kurds in Turkey," in D. F. Eickelman and J. W. Anderson (eds.), *New Media in the Muslim World: The Emerging Public Sphere*, Indiana University Press, 1999.

- (3) 「文化協会」とは現在トルコにおいて、文化目的で活動している団体の総称である。文化協会は現在約2万団体あり、その中には世俗主義を国是とする現代トルコにあって表立って宗教を打ち出しはしないが、実際には宗教思想を背景に有する団体も多数含まれている。本稿で取り上げる文化協会は、アレヴィーの運営する文化協会である。
- (4) 公共圏とは、「私的領域」と「公権力の領域」との間にある中間領域のことである。公共圏の代表的な研究に関しては、J. ハーバーマース『公共性の構造転換』細谷貞雄(訳)、未来社、1973 (J. Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied: Hermann Luchterhand Verlag, 1971) を参照されたい。
- (5) この組織については、山口昭彦「クルディスタン労働者党」大塚和夫他『岩波イスラーム辞典』岩波書店 2002, 346. 参照。
- (6) ちなみに「知識人の炉辺 Aydınlar Ocağı」は、1970年に歴史学者イブラヒム・カフエスオール İbrahim Kafesoğlu によって組織された。この組織に関しては、間寧「知識人の炉辺」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店 2002, 630. 参照。
- (7) van Bruinessen *op. cit.*, 8-9.
- (8) 労働運動や学生運動の激化、さらに親イスラーム政党などの反国家的な行動を懸念した、参謀総長ケナン・エヴレンを中心とする軍が1980年9月12日未明に起こした軍事クーデター。これによって、トルコ第2共和制が終焉する。新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001, 281-282.
- (9) van Bruinessen, "Alevi Revival," 9-10.
- (10) トルコ語で「赤い頭」の意。ペルシャ語ではキズィルバーシュ。東部アナトリアでオスマン朝に対して反乱を企てたサファヴィー教団の信徒。羽田正「キズィルバーシュ」大塚和夫他『岩波イスラーム辞典』岩波書店 2002, 302. 参照。
- (11) トルコのエーゲ海沿いに住むテュルクメン部族の1つ。アレヴィーを自称する人々も多いが、スンナ派を自称する人々もいる。
- (12) S. Kutlu, "Aleviliğin Dini Statüsü: Din, Mezhep, Tarikat, Heterodoksi, Ortodoksi, veya Metadoksi," *Diyanet Vakfı, İslamiyet* 6/3 (2003), 31-54, İstanbul.
- (13) アラブ世界の宗教的少数派と同様に、アレヴィーたちもタキヤー(宗教共同体あるいは個人の安全に重大な危機が訪れた場合に信仰を隠すこと)を保持していたようだが、少なくとも80年クーデター後の民政移管以降は、そうした慣習は少なくなっている。
- (14) 聖者ハジュ・ベクタシを名祖とするスーフィー教団。この教団に関しては、今松泰「ベクタシ教団」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店 2002, 870. 参照。

- (15) B. Aksoy, "Dersim'de Yer Adlarının Kökeni-3," *Munzur* 3 (2000), 3-14.
- (16) B. Aksoy, "Anadolu'da Yer Adların Kökeni-2," *Munzur* 7 (2001), 17-18.
- (17) V. Timuroğlu, "Alevilik, Şiilik, Bektaşilik İlişkileri," *Munzur* 5 (2001), 69-73.
- (18) *Zaman* 15. 8. 2004.
- (19) C. Şener, "Hacı Bektaş Veli Anma Törenleri," *Karacaahmet Sultan* 66 (2001), 3.
- (20) ここでは、現代イランで信奉されている12イマーム派を示す。
- (21) F. Altun, "Aleviler'in İnanç Kimliği," *Ehl-i Beyt* 7 (2001), 3.
- (22) F. Altun, "Dünya Ehl-i Beyt Vakfı Genel Başkanı Fermani Altun Şöyle Konuğu," *Ehl-i Beyt* 7 (2001), 23.
- (23) Ali Rıza Uğurlu, "İslam ve Terör," *Cem* 114 (2001), 6.
- (24) N. Öktem, "Eski Türklerde Din," *Cem* 114 (2001), 10-11.
- (25) よく引用されるメニコフの研究は、ベクタシ教団の信仰に関する研究で、「イスラーム化されたシャーマニズム」という件である。それが顕著に現れている代表的研究は、Irène Mélikoff, *Hadji Bektach: un mythe et ses avatars: genèse et évolution du soufisme populaire en Turquie*, Leiden: Brill, 1998.
- (26) A. Yıldırım, "Alevi Varlığı," *Yol* 9 (2001), 1-10.
- (27) H. Tuğcu, *Genç Erenler* 34 (1998), 4.
- (28) Mehmet Ş. Eygi, "Aleviler ve Sünniler," *Genç Erenler* 28 (1998), 25-26.
- (29) Ü. Selman, "Kadiri-Alevi Yakınlaşmasında Yeşil Hoca," *Genç Erenler* 34 (1998), 26-30.
- (30) H. Tuğcu, "Alevi-Sünni Kardeşliği," *Genç Erenler* 32 (1998), 20-23.
- (31) 名和克朗「民族論の発展のために一民族の記述と分析に関する理論的考察—」日本民族学会『民族学研究』57/3 (1992), 297-315。アイデンティティ形成に関する議論の1つ。名和の述べている民族論によれば、「民族」は全体社会(=国家・政府)による「名付け」と対面的共同社会との「名乗り」の間に生じる相互作用の中で形成されているという。